

刈萱

ツレ 松若の母

子 松若

ワキ 宿主

シテ 松若の父刈萱殿

ヲカシ 宿主の下人

地は 紀伊

季は 雑

「浮雲さそふ夜嵐や。く。月のゆくへを尋ねん。

「是は筑紫筑前の国。刈萱殿と申す人の妻や子にて候。さても刈萱殿。たゞ仮初の物まうでと偽り御出で有りて後。かつて音づれましまさず。過ぎにし秋の頃かとよ。風の便りの音づれに。紀の国高野とやらんに。様かへ憂き世を厭ひおはしますと承りて候へば。かなはぬまでも尋ね行き。かはれる御姿をも見参らせんと思ひ立つ。

「心を道のしるべにて。く。親子いざなひ立ちいづる。今日幾日。結びかへたる草枕。夢に道行く心地して。はるぐこゝに紀の国や。高野の麓に聞えたる。かぶろの宿に着きにけり。く。

「いかに誰か御入り候。一夜の宿を御貸し候へ。

「安き間の事御宿参らせうずるにて候。奥の間へ御入り候へ。

「心得申し候。

母「いかに松若。

子「御前に候。

母「わらは、女の身なれば高野へはかなはず。御身は是より寺に上り。父のゆくへを尋ねて下り候へ。

子「畏つて候。はるぐ分け上り候へども。しんくとして人にも逢はず。あら心すごの道や候。此所にやすらひ人を待ち。高野への道を尋ねばやと思ひ候。

シテ一声「捨てはつる。身を奥山の住居こそ。憂き世をいとふ心なれ。

サシ「是は高野住山の沙門にて候。夫れ人間のあだなる事。風の前の灯檠花一日。人もつて同じかるべし。此理りに任せつゝ山林にまじはり。

歌「採るや薪のしばくも。く。有りと思はぬ心かな。大師出世の時まちて。我等ごときの者までも。慈尊三会の暁に。生れん事ぞ頼もしき。く。

「あら痛はしや裾は露。袖は涙に打ちしをれて。さながら思ひありと見え給ひて候。いかなる人にてましますぞ。」

「是は人を尋ねて高野へ上り候ふが。在所を知らず候。」

「あら何ともなや。高野のひろき事を語つて聞かせ申さうこなたへ渡り候へ。抑高野と申すは。八葉の嶺八の谷に坊多し。まづ壇上より奥の院の道。」

三十七町。則ち三十尊を表せり。院を四十九院に分つ事。都卒の内院を顕はし。或は念仏三昧の道場も有り。其外堂塔薨を並べて夥し。皆これ真言一つの霊場にて。鈴の声々物すごく。谷々嶺々より立ちのぼる。護摩の煙雲や霞と等しうしてさんかうを潜め。誠は大師結界の地と見えて。心も言葉も及ばれず。かほどに広き所を。いづくを境に御尋ね候。あまりに大やうに御入り候ふものかな。

子「先に人に尋ねて候へば。発心の人の集まる。刈萱堂を尋ねよと申し候ひつる。

シテ「それはさる事も候ふらん。我等如きの荒入道多く集まり。初心の程は木を切り水を汲み。又ある時は里々に出で頭陀を行ずる人も有り。それも諸国の集りにて。左右なう尋ねあふ事難かるべし。さて御身はいづくの人にて渡り候ふぞ。

子「是は筑紫筑前の者にて候。

シテ「筑前にては誰にて渡り候ふぞ。

子「刈萱と申し候。

シテ「刈萱殿のためには何にて渡り候ふぞ。

子「唯一子にて候。

シテ「言語道断。是なる者をいかやうなる者ぞと存じて候へば。古郷に残し置きたる一子にて候。何ものか此山路を凌ぎはるばる来候ふべき。持つべきものは子にて候。やがて父と名乗つて喜ばせばやと

思ひ候。や。あら何ともなや。一度切りたる恩愛の絆。三世不可得のうちに。誰やの者か子となつて来り候ふべき。我持戒の身なれども。妄語を出だし此者を返さばやと思ひ候。何筑前の人にて渡り候ふとや。

子「さん候。

シテ「只今御尋ねの刈萱殿は。去年の秋のころ往生にて渡り候ふよ。御歎き尤もにて候。やがて古郷に御

下り候へ。

子「麓に母御の御入り候ふ程に。此由申し候ふべし。

シテ「何と麓に母御の御入り候ふとや。急ぎ御下り候ひて。此由御申し候へ。

シテ「別れし我子に行き合ひて。共に言葉をかはせども。

子「父とも知らぬ心こそ。神ならぬ身のならひなれ。

シテ「落つる涙をせきとめて。

子「共に心を。

シテ「筑紫人。

地「空言しける父ぞとは。後にぞ思ひ白雲の。たづき
も知らぬ山中の。道より別れ立ち帰る。く。

ワキ詞

「只今の女性の旅人は道より風の心地せしと仰せ候
ひしが。以ての外御煩ひの由に候。罷り出で、尋
ね申さうずるにて候。誠に是は以ての外御煩ひと
見え給ひて候。なふく。や。言語道断。よし
なき人に宿を参らせ迷惑仕りて候。仮初の風の心

地と仰せられ候ふ程に。色々看病仕つて候へども。
空しく成り給ひて候。又御子息を寺へのぼせ申さ
れて候ふが。いまだ御下りもなく候ふ程に。路次
まで御迎に参らばやと思ひ候。御下り待ちかね申
して候。母御の風の心地と仰せられ候ふ程に。色々
看病仕りて候へども。空しく成り給ひて候。かゝ
る面目も無き次第にて候。こなたへ御出で候へ。

子「うらめしや我等程物思ふ者はよもあらじ。一方な

らぬ身の歎き。さて自は何となるべきぞや。あら
悲しや候。

ワキ 「御歎き尤にて候。又御最期の時硯料紙を召されて。
此文を残し置き給ひて候ふ御覧候へ。

ワキ 「いかに誰かある。

ヲカシ 「御前に候。

ワキ 「汝は御寺に上り。一大事の子細を申さう。御客僧
に御下りあれと申せ。

ワキ 「只今呼び下し申す事余の義にあらず。旅人に宿を
かして候へば。仮初の風の心地と仰せ候ひしが。
今夜空しうなられて候。そと供養あつて給はり候
へ。

シテ 「安き間の事にて候。いづくに渡り候ふぞ。

ワキ 「こなたへ御入り候へ。

シテ 「里へ下り候ふには。師匠聖人に十念を受けて下り
候。忘れて候ふ程に。十念を受けてやがて罷り下

り候ふべし。

ワキ「是は仰せにて候へども。此際にて候ふ程に。何の苦しう候ふべき。そと供養あつて御上り候へ。

シテ「いや我々が大法にて候ふ程に。やがて罷り下らうずるにて候。

ワキ「しばらく。此間申し承り候ふも。かやうの一大事を申さうずる為めにてこそ候へ。さやうに候はゞ。大師も御照覧候へ。今日より中をたがひ申さうず

るにて候。

シテ「なふく心を静めて聞しめされ候へ。只今空しく成りたると承り候ふは。某が妻にて候。又あれに候ふは一子にて候。以前御寺にて某を尋ねて候へども。父は空しく成りたる由を申して追つ返して候ふ程に。何と思ふとも対面の事は思ひもよらぬ事にて候。

ワキ「言語道断。ふらちなる事を承るものかな。なふ不

得心なるも事によりたる事にて候。御出で候ひて御対面あらうずるにて候。

シテ「やあいかに松若。以前寺にて父は空しく成りたると申し候ひつるは偽りにてあるぞとよ。

子「げによく見れば別れし父にてまします不思議さよ。始めの別れは偽りにて。

シテ「後の別れは。

子「まことなる。

地「同じくは母の別れをも。又偽りになさばや。

シテ「それに持ちたるは母が文にてあるか。是へ持ちて来り候へ。諸共に読み候ふべし。それ有為の転変を見るに。芝蘭は散じやすく瑠璃はもろし。本の雫末葉の露の下草の。後れ先だつ世の習ひ。今初めたる歎きと思はずして。父にも尋ねあふならば。同じ如くに様をかへ。自が菩提をとひて得さすべし。それにつけては何よりも。唯仮初と思ひし身

の。今は歸らぬ道に出でゝ。中有の闇に赴く憂の
涙。悲しみても猶余りあり。又いにしへ人の御か
たへも。万づ申したき事のみ多けれども。次第に
此身も弱り心さだかならざれば。さながら止め申
すなり。高野山。行かぬ習の道なれば。煙とな
りて立ちや上らんと。

地「書き流したる水茎の。跡を見るこそ涙なれ。

子「さこそげにわが母の。我を遅しと松風を。待たで

も花や散りぬらん。

シテ「花は散りて根にあれば。又来ん春も頼みあり。

子「月は出でゝ入るなれども。世に尽きせずは見るべ
し。

地「それ人間の別れは。又いつの世にかあふべき。かゝ
るうき世にあだし身の。何中々に生れ来て。さの
みに物や思ふらん。

クセ「さればかたじけなき。我等が本師釈尊は。拔提河

のほとりにて。遂に涅槃を遂げ給ふ。況んや我等。
迷妄の衆生として。死をばいかでのがるべき。

シテ「凡そ人界の有様を。

地「しばらく思惟して見れば。くはいらいほうとうに
ひかを争ひ。まこと何れの処ぞや。妄想転倒ゆめ
まぼろしの世の中に。有るを有るとや思ふらん。
今よりしては速に。心の玉をみがきつゝ。同じ如
くに様をかへ。母の菩提を諸共に。弔ふ事ぞ有り

がたき。く。